

道免和久(監修)

竹林 崇(編集)

行動変容を導く！

上肢機能回復アプローチ

脳卒中上肢麻痺に対する基本戦略

評者 森岡 周

畿央大大学院健康科学研究科

リハビリテーションの理念は全人的復権である。故に、それに携わる専門職は対象者の全人的復権に向け日々努力を怠ってはならない。なぜなら、対象者の人らしさを復権するといった究極の目標掲げているからである。

人らしさを象徴するものとして上肢による道具操作が挙げられる。乳児は環境に対して挑戦的に行動を繰り返すことでスキルを有した上肢機能を獲得していく。人は生まれながらにして意のままに身体を操れる機能を持ってはいない。言い換えれば、司令塔としての脳の組織化のためには、上肢を介した行動を起こすことが優先されるべき必要条件であるわけである。

本書は単純に脳卒中上肢麻痺に対するアプローチと題さず「行動変容を導く！」という修飾語を含んでいるところに特徴がある。行動は目的を伴う。目的を伴わない運動と伴う運動は関節運動が同じであっても、運動の組織化にかかわるニューロン活動が異なることは自明であり、だからこそ課題指向型に介入しなければならない。課題指向型とは単に日常生活活動(ADL)を繰り返すことではなく、療法士の教育の下対象者が能動的に挑戦的課題に取り組むといった志向性を意味するものである。

本書は全6章で構成されている。その特徴は、1章に行動変容を配置し、それを読者に強く意識させるとともに、2章にも課題指向型アプローチを配置しており、その配分が編者の意図を感じるくらい多いところにある。ともすれば臨床関連の書籍はマニュアル本になる傾向があるが、本書は1・2章の理解なくして5・6章の症例検討や実際例に行くべからずという編者の強い意図を感じる。

要するに、本書は単にアプローチの紹介にとどまらず、神経学的かつ心理学的な根拠が記されているところに特徴があり、なぜ運動の量が必要か、なぜ

運動の質(難易度調整や目標設定など)が重要かについて十分に解説がなされている。そして、アウトカムメジャーをあえて章立てで構成しているところにも意図を感じる。リハビリテーションは評価に始まり評価に終わる。適切な評価の実施なくしてリハビリテーションの進歩はない。

本書は道免和久先生のチームによる臨床と科学の融合に基づいた結晶であり、そのチームの旗手として大部分を執筆している竹林崇先生の気概を十二分に感じ取ることができる。お二人は一貫して脳卒中後の運動障害に対する臨床・研究・教育に従事されてきた。彼らの長きにわたる経験に加え、現在進行形の科学的根拠を含んでいる本書に収載されている情報は信頼できるものであることは間違いない。

本書は臨床で格闘している療法士の金科玉条として位置付けられる作品と思われるが、それは時に融通のきかない例えとしても用いられる。日々進む科学技術に足並みをそろえながら今後柔軟に改訂を重ねていただきたい。いずれにしても、リハビリテーション関連職種・学生の皆様に手にとっていただきたい良書として自信を持って薦めることができる。

B5判・304頁・2色刷
定価：本体4,000円＋税
医学書院刊、2017年10月